

## 琳派の花園あだち

足立区立郷土博物館(足立区大谷田) 22.10.09~12.11



日本美術の流派の一つ「琳派」は、デザイン性の高さ、金箔や銀箔を贅沢に使った豪華絢爛な絵画や工芸品などで、江戸時代に京都で活躍した画家の「俵屋宗達」や「尾形光琳」などを代表とする国内外で人気のある美術である。「酒井抱一」が現在の足立区千住地区に住む文人度々訪ねていたことから、足立区との縁

が深いとされ、弟子の「鈴木其一」門下の「村越其栄」が当地に居を構えていたため、多くの作品が区内の神社や個人宅などに残されている。

本展は、“絵の主役になる花や動物を浮きたたせるデザイン性の高さや、金箔の豪華さと涼やかな銀箔の美しさ”を十分に堪能することができる。



村越其栄 《秋草図屏風》

江戸時代後期

画伯は、鈴木其一に絵を学んだ千住の琳派絵師で、ひまわりや朝顔と共に秋の草花を描いている。



酒井抱一 下絵・原羊遊斎 蒔絵 《筑波山に都鳥墨切蒔絵大盃》1817年

筑波山を背景に、墨田川を象徴する3羽の都鳥（ユリカモメ）が、川辺に遊ぶ姿が黒漆（こくしつ）で描かれている。

画伯が下絵を描いた盃は、文化14年に開催された2度目の酒合戦で実際に使用されたとされている。